

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：35302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01641

研究課題名(和文) 体育科目とキャリア科目の連携を伴う野外教育におけるレジリエンスの育成

研究課題名(英文) Cultivating resilience in outdoor education courses that link the subjects of physical and career education

研究代表者

西村 次郎(Nishimura, Jiro)

岡山理科大学・工学部・教授

研究者番号：50278909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が対象とした生涯スポーツ科目は、とすれば楽しいだけの授業に陥りやすいため、研究分担者が授業設計をやり直し、授業で活用するワークシートを開発した。目標設定と振り返りを取組毎に行わせ、社会人基礎力チェックシートの結果に基づいて、強みや弱みを授業内と課外で意識させる。その結果、事前事後で社会人基礎力が有意に向上した。社会的スキルの向上はレジリエンスの向上に繋がる。本研究の汎用性を確認するために、研究代表者が他の授業においてアクションリサーチを行い、その効果を確認した。2つの科目の授業実践により、スポーツ関連科目にキャリア教育の要素を導入できる可能性を示すことができたと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生涯スポーツ科目がキャリア教育として位置づけられる可能性を示したことは大きい。また、挑戦的な経験をさせ、それを乗り越えさせることで、成功体験を作ることができる。涵養に繋がると考えている。このような経験から学んだことを現実の学生生活に関連づけさせたり、対比させたりして、予測困難な事態や想定外の事態への対応方法を習得させることが期待できることから本研究の意義は大きい。また、合理的な配慮が必要な学生であっても本科目の実践は有効であることも確認できたため、応用範囲も広がる。

研究成果の概要(英文)：The subject of this study is a lifelong sports course. Since this course can easily become purely fun, a member of the research team revised the lesson design and developed worksheets for use in the lessons. Students set goals and conducted reviews for each activity and developed an awareness of their extracurricular and in-class strengths and weaknesses based on the results of an adult fundamental ability checklist. When the scores from these checklists were compared, those from after the course were significantly higher than those from before. Improved social skills led to an increase in resilience.

To confirm the general applicability of this study, the principal investigator conducted action research in another course and confirmed its effectiveness. Through the practical application of these worksheets in two different courses, this study showed that career education elements can be introduced into sports-related courses.

研究分野：生涯スポーツ、自然体験、野外活動

キーワード：キャリア教育 社会人基礎力 生涯スポーツ 自然体験 カヤック

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学のユニバーサル化の進展に伴い、将来を展望することを高校時代に行わず、大学に先送りする傾向が強まり、進路意識や目的意識が希薄な学生が増加している。また、就職活動時の失敗や挫折が生む強いストレスを起因とした悲観的状况を克服できない学生が多いことも問題である。このような背景から、いかなる状況でも新たに希望を見出し、乗り越えられる能力を学生に涵養する必要性が高まっている。そこで、レジリエンスの涵養に着目している。レジリエンスの高い人は、困難や逆境に適応し、精神的な回復力が高いからである。

レジリエンスを高める有効な教育手法の一つにスポーツや自然体験を持つこと(佐伯, 2007)がある。それを踏まえて地方理工系大学である R 大学ではカヤックを用いた体験型の教育手法を初年次教育やキャリア科目と連携して導入している。例えば、「地域フィールドスタディ」の授業では、シーカヤックを用いた活動を行い、非日常の場面において失敗や挑戦の経験を提供している。自然体験と身体的活動の効果を端的に表す例として、発達障害を持つ学生が、コミュニケーション能力を大幅に向上させ、問題なく大学生活を過ごした事例もある。このように経験的に教育効果を確認しているが、学問的な検証が不十分なのが課題である。また、授業に自然体験を組入れることにより、その自然の価値や自分で制御できない自然環境の変化を考えさせ、豊かな自然を次世代に繋ぐという未来までの時間軸を熟考させられる。時間的展望の延長は、過去から現在の時間軸を認識させ、今の状況が過去の積み上げに起因しており、今の状況を変えるには、過去を振り返り、その省察に基づいて目標設定する大切さを学生に理解させられる。学生が自分を変えられると認識できた時の成長に期待している。本申請の事前準備のために、自然体験と身体的な活動体験の教育効果を測定するための尺度を試作し、事前と事後の調査を学生と教員に実施した。その結果、カヤックのような活動において、希望の保有に加えてレジリエンスが涵養できる可能性やフロー体験の重要性を確認した(松尾, 2015)。

2. 研究の目的

学生が如何なる困難に直面しても、そこから新たに希望を見出して、困難を乗り越えられるために、レジリエンスを涵養できる教育プログラムを開発(授業改善やワークシート開発)し、その教育効果を明らかにすることである。

3. 研究の方法

次の方法で研究を行う。

- ・レジリエンスの涵養に関連するとされる社会的スキルに着目し、社会人基礎力チェックシートを活用して、事前事後の変化を確認する。
- ・学生が記入したワークシートを質的に分析し、教育効果を検証する。
- ・教育効果の継続性を確認するための追跡調査をする。

4. 研究成果

研究成果は以下のとおりである。

(1) カヤックを使った自然体験活動

レジリエンスを育成する教育方法として野外活動や自然体験がある(佐伯, 2007)。そのことを踏まえて、カヤックを使った自然体験活動を取り入れたアクティブラーニングの教育効果を測るために、奄美大島(4泊5日)での実習を伴う生涯スポーツ科目を調査対象とした。同科目には、自然体験、シーカヤック、シュノーケリング、地域交流、地域文化の学習などの内容が含まれ、学生にとって多数の困難あるいは挑戦的な内容が含まれている。まず、2014年12月にカヤックを活用している課外の教育プログラムを対象に予備的な調査を実施した。その結果、体験型の授業は、とすれば単に楽しいだけの授業に陥ってしまうことが分かった。このため、研究代表者の授業担当者に研究分担者が協力して、授業内容の点検や授業設計の見直しを行い、それに合わせた実習用のワークシートの開発も行った(松尾, 2015)。その成果を活用して授業を実施してもらい、2015年と2016年に現地調査を行った。2015年には、社会人基礎力のチェックシートと学習ポートフォリオを使って教育効果を確認した(松尾・望月, 2016)。2016年には、授業改善をさらに進めつつ、AAC&Uのバリューループリックを活用し、チームワーク力の向上を確認し、自己評価と教員評価の差異についても学生に検討させた(松尾他, 2017)。ここまでの研究により授業の事前・事後での教育効果の測定は実施できたが、その効果の継続性については、十分に検討できていない。そこで、2016年度受講学生(21名)を対象に、2017年2月(協力者14名)と2018年2月(協力者8名)に追跡調査を行った。

2018年2月の追跡調査に際して実施したアンケートのうち、学んだこと、感じたことの項目から、学生が教育効果の継続を実感していることが分かった。ここで、21名中、2回の追跡調査に協力してくれた学生は6名(履修者の約1/3)に着目してみる。ワークシートやアンケートの自由記述をみると、仲間ができたこと、コミュニケーション力の向上やリーダーシップが向上したこと、困難への対処の仕方を学んでいることが分かった。1年6ヶ月後でも、学生が教育効果を感じていた。本授業が困難を乗り越える力を涵養するきっかけになっていることが示唆できた。また、本授業で培ったコミュニケーション能力等が、実際に他の授業や就職活動に際して、活かされていることも分かった。

(2) 分野連携によるキャリア形成支援に繋がる体育科目

R 大学では、生涯スポーツ科目において学生を深い学びに導くために、キャリア教育、教育学、制御工学等の異なる分野の教員が連携している。松尾・望月(2016)において、次のようなことを明らかにしている。学生に社会人基礎力の項目を事前に意識づけさせつつ、様々な取組を学生に行わせた結果、学生に自分の強みや弱みを意識しながら活動させることができた。自己評価ではあるが、社会人基礎力を伸ばすことができた。加えて、事前・事後のアンケート、実習中の観察、及び学習ポートフォリオの分析から協同性の向上についても確認できている。

そこで、本研究では、分野連携による体育科目の新しい役割について、キャリア形成支援の観点から考察した。生涯スポーツ(奄美大島での実習)と生涯スポーツ(北海道でのスキー実習等)、キャリア形科目の地域フィールドスタディ(シーカヤックを使った仲間作りを導入)の3科目を調査対象にした。これらの授業では、教育効果の可視化を行うために、社会人基礎力の項目を事前に意識づけさせつつ目標設定と振り返り等を記入するワークシートを開発して導入している。また、教育工学の視点から、授業設計を見直し、授業改善を行っている。これにより、学生が授業の内容に対する取組状況が分かるようになってきている。これらのワークシートを集めると簡易的な学習ポートフォリオになる。本研究では、研究のためのアンケート調査は行わずに、これらのワークシートを分析することで、教育効果を明らかにする方法をとった。特に、分野連携による教育効果に着目して分析した。

本研究では、学生に社会人基礎力の項目を事前に意識づけさせつつ、様々な内容を学生に行わせた。その結果、学生は、自分の強みや弱みを意識しながら活動できていた。このことは、事前・事後のアンケート、実習中の観察、及び学習ポートフォリオの分析から確認できる。これは、キャリア教育との連携による効果である。また、目標を学生間で共有することもしており、お互いに目標達成のために協力しあう場面も見られた。我々は、レジリエンスを育成する教育方法の一つとして野外活動と自然体験(佐伯,2007)に着目している。レジリエンスを育むことで、予測困難な時代を生き抜く力を涵養できると考えている。上述した3科目とも自然体験を含んでいる。実際に、学生が直面する様々な課題に対して、目標達成のために学生自らが試行錯誤を繰り返し、考え抜いて、困難を乗り越え、目標を達成する様子が観察できている。このことが、本授業の有効性を示したと考えている。

(3) 学習ポートフォリオの分析による授業改善の検証

学習ポートフォリオの分析の過程で、授業改善の効果による違いがあることが分かった。授業改善の支援を行った年度とそうでない年度では、学生が作成した学習ポートフォリオの質が低下していることが分かった。そこで、2015年~2018年度の71名分の学習ポートフォリオ等を分析し、教育効果がどのように変化するかを検討した。

各年度に作成された学習ポートフォリオの調査結果は次のとおりであった。

(1)2014年度の調査 シーカヤックを用いた取組を試行して、プレ調査を行った。その結果、単に「楽しかった」という表面的な振り返りしかなく、活動毎の目的を学生が理解していなかった。そこで取組毎に目標設定や振り返りができるワークシートの必要性を認識した(松尾,2015)。

(2)2015年度の調査 取組毎に目標設定シートと振り返りシート(計20枚)を記入させた。ところが、自然体験(カヤックなど)をすると、その体験の感動が大きく、目標設定に対する振り返りより自然体験の感動を記入する学生が多かった。

(3)2016年度の調査 2015年度の結果を踏まえて、目標設定と振り返りを1枚にまとめ、目標設定と振り返りが対比できるようにした。これにより、振り返り時に、自らが設定した目標との対比を行うようになった。これで授業改善は終了。

(4)2017年度~2018年度の調査 担当教員によりワークシートが改変されていた。詳細な指示がなくなり、大きな枠への記入を求めていた。また、学生にインタビューしたところ、授業中に振り返りの仕方が説明できていなかった。そのため、学習ポートフォリオを見ると、表面的な振り返りしかできていなかった。このことから、教員のファシリテーションの重要性が改めて分かった。

学習ポートフォリオの記述内容をみると、自ら設定した目標に対し、行動規範を考え、振り返りを行っていた。学生の記述量も増えていた。しかしながら、授業改善の支援が終わると、授業担当者がその意図を理解せずにワークシートを改変していた(面倒な説明をしなくてすむように簡略化していた)。教員が何を内化・外化したらよいのか不明であるため、学生は目標設定とは関係のない振り返りをしていた。また、何も記入していないワークシートも目立った。これは授業担当者に単に授業設計の支援やワークシートの使い方を研修するだけでは不十分であり、ファシリテーションの方法について研修できていないのが原因であると考えている。

(4) 野外実習における障がい学生への合理的配慮と合意形成の過程

本研究が対象とする授業において、合理的配慮が必要な学生が参加することになった。このことが、授業の雰囲気と教育効果を大きく変えた。本研究の流れからすると副次的な内容であるが、合理的配慮と合意形成の過程を事例として残し、その教育効果を検討することに意義があると考えた。

私立大学では、所謂、「障害者差別解消法」により障がい者への合理的配慮が努力義務である。

合理的配慮とは、負担が重すぎない範囲での配慮であり、障害の種別や教育内容に応じて、話し合いを通じた合意形成が重要になる。ここでは、野外実習科目での合理的配慮について検討する。ここでは、R大学の平成29年度「エコツーリズムのための野外スポーツ」(選択科目、19名受講)を受講した身体に障がいのある学生T君への取組についてまとめる。本授業は奄美大島で行い、「カヤック」「シュノーケリング」「無人島体験」等が含まれる。なお本研究に際し、T君と母親に研究倫理上の配慮を行った。

合理的配慮の内容を次のように合意形成を図った。1)入学前の大学としての取組 入学前の平成29年3月に、T君と母親、入学予定学科教員及び教養系教員、支援課職員による面談を行った。そこでは、3つのポリシーを説明し、R大学の教育方針の理解を深めてもらい、障害の特性やニーズを把握する建設的対話を行った。合理的配慮への積極的な対応やT君へ寄り添うことを伝えることで、T君及び母親と大学との間で信頼関係を構築できた。2)ニーズの把握と意向尊重 同年4月、野外実習参加の合理的配慮が求められ、5月に、T君と母親、教員で面談を行った。相手の自己開示性を尊重し、傾聴を心がけた結果、相互理解が深まった。3)根拠資料の収集 T君の障がいの状況を把握するために、これまでの成育歴等、障がい者手帳の種別・等級・区分認定の状況等、医師の診断書の3点について確認を行った。4)合意形成と合理的配慮の提供 6月に、プールでの事前学習において、T君の動作や身体的状況についての確認作業を行い、合理的配慮の内容を検討した。教員のみが対応するのは困難であるため、T君の活動を支援するTAの配置とその経費について大学に要請することとした。この時、T君の挑戦する気持ちへの配慮が必要であることが分かった。

実習中のT君のワークシートには、仲間の大切さや日常の便利さを実感しつつ、カヤックに乗れた喜びが表現されていた。他の学生もT君と自分を相対化し、困難な状況でも挑戦する大切さを学んでいた。

障がい学生への合理的配慮には、相互理解による信頼関係の構築が必要であり、教育の目標、内容、評価の本質は変更せず、個々のニーズを把握した柔軟性のある調整が重要である。また、本当に必要な支援を見極める複眼的な視点も必要である。

本授業の終了後、参加学生に対してインタビュー調査を実施したところ、当該学生が授業を受講したことで、授業の性質や学生の授業への参加意識を変えたことが分かった。例えば、当該学生が困難な状況でも諦めずに挑戦している姿を通して、諦めないで挑戦する意識が確認できた。さらに、障がい者は常に助けなければならない存在と考えていた学生が、支援すべきこととそうでないことを明確に区別すべきだということも理解できたと発言していた。このように、通常の授業とはことなる教育効果があったことを付記しておく。

<引用文献>

アンドリュー・ゾッリ他(2013)『レジリエンス復活力』,ダイヤモンド社.

平野真理(2015)『レジリエンスは身につけられるか』,東京大学出版会.

佐伯年詩雄(2007)「スポーツ・野外活動・自然体験が育むもの」『児童心理』,61, pp254.

- 258

松尾美香(2015)「大学における身体的な活動を通じた深い学び ワークシートの開発と授業設計」『岡山理科大学紀要51号B』,13-23.

松尾美香・望月雅光(2016)「カヤックを使った自然体験活動を取り入れたアクティブ・ラーニングの教育効果」『京都大学高等教育研究』,22,87-90.

松尾美香・望月雅光・松下尚史(2017)「自然体験や野外活動を伴った授業の教育効果」『第23回大学教育研究フォーラム発表論文集』,86-87.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松尾美香、望月雅光	4. 巻 22
2. 論文標題 カヤックを使った自然体験活動を取り入れたアクティブ・ラーニングの教育効果	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 京都大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 87-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西村次郎
2. 発表標題 野外実習における障がい学生への合理的配慮と紛争防止
3. 学会等名 日本野外教育学会第21回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西村次郎、松尾美香、望月雅光
2. 発表標題 野外実習における障がい学生への合理的配慮と合意形成過程
3. 学会等名 全国体育連合研究フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松尾美香、望月雅光
2. 発表標題 青年期の挫折経験とレジリエンス
3. 学会等名 大学教育学会第39回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松尾美香
2. 発表標題 教職履修者のアクティブ・ラーニングへの適応状況について
3. 学会等名 日本教師教育学会第26回研究大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松尾美香、望月雅光、松下尚史、西村次郎
2. 発表標題 複数の領域が連携したキャリア教育とレジリエンスの涵養
3. 学会等名 日本キャリア教育学会第38回研究大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松尾美香、望月雅光
2. 発表標題 巧まずして育む協同 - シーカヤックを使った授業実践 -
3. 学会等名 日本協同教育学会第13回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西村次郎、松尾美香、望月雅光
2. 発表標題 分野連携による体育科目の新しい役割-キャリア形成支援の観点から-
3. 学会等名 第5回大学体育研究フォーラム平成28年度九州地区大学体育連合春季研修会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松下尚史、松尾美香、望月雅光
2. 発表標題 プロジェクトアドベンチャーを初年次教育に導入するための試行
3. 学会等名 第23回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松尾美香、望月雅光、松下尚史
2. 発表標題 自然体験や野外活動を伴った授業の教育効果
3. 学会等名 第23回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松下 尚史 (Matsushita Hisashi) (20229470)	岡山理科大学・工学部・准教授 (35302)	
研究分担者	松尾 美香 (Matsuo Mika) (30521067)	岡山理科大学・工学部・准教授 (35302)	
研究分担者	望月 雅光 (Mochizuki Masamitsu) (70284601)	創備大学・経営学部・教授 (32690)	